

狩野派 能 絵 二十三枚

江戸前期には、狩野派を中心に、多くの能や狂言の絵が製作された。それらは構図ばかりではなく、装束の色や模様まで同じ場合も多く、特定の粉本があって、それを元に作られたと考えられている。

この二十三枚〈老松・白楽天・和布刈・兼平・忠度・井筒・野宮・采女・杜若・雲林院・小塩・西行桜・龍田・三井寺・芦刈・景清・夜討曾我・鍾馗・舍利・車僧・融・海人・猩々〉も同様で、九枚（下線を付した曲）は狩野柳雪筆『能之図』（国立能楽堂蔵）と、装束の彩色や模様は異なるものの、構図は同じである。柳雪本にはない絵の場合も、神戸女子大学図書館蔵の『能狂言画帖』〈舍利〉・『能狂言図巻』〈龍田〉などはほぼ同じ絵柄で、こちらは装束の色や模様までおなじである。〈小塩〉は国立能楽堂蔵『能楽図帖』と、〈三井寺〉は『能楽手鑑』と同図である。

管見に入っていない絵柄を有する曲が〈雲林院・景清・車僧・融〉で、特に〈雲林院〉は多数の曲を有する『能絵鑑』などにも入っていない。

柳雪本や神戸女子大本などとの前後関係をはじめ、当時の製作事情の一端を知ることの出来る貴重な資料である。

絵は縦 217 mmあるいは 231 mm×横 307 mm。二種類の大きさの能の絵が集められている。一曲ずつ銀紙の細い枠を付けて、厚紙の台詞に貼られている。右上方に銀紙の題簽が貼られ、曲名が漢字で記されている。背景は茶褐色で塗られており、シミ・擦れなどが多いが、絵の部分にはほとんど損傷がない。極彩色の細密画といってよく、特に上から施されている金泥の線書きが流麗で精緻である。人物の姿勢が正しく保たれており、視線や表情もしっかりしている。台紙には虫損が見られるが、大きく絵にまで及んでいるのは、〈猩々〉のみである。

絵柄は全体に統一が取れており、本来はもっと多くの絵が存在したのではなかろうか。柳雪本の六十曲と同レベルか、それ以上あったものの一部であろう。

注目されるのが、全ての絵の上方、左右どちらかに台紙共々穿たれた 3 mm程度の穴の存在である。二枚を表裏に重ね、全部一緒に綴じられていたのであろうか。虫食いの跡もその状態であったことを示している。また絵には上方の左右どちらかに、元題簽の痕跡があるので、原型は違った形だったのだろう。

類画と比して絵に活力が感じられることと、現状の形態から、多くの類画のお手本的な物として使用された可能性があるのかもしれない。

展示は、それぞれの絵について、別系統の絵柄を有する『能絵鑑』（法政大学能楽研究所蔵）と、共通するものがあれば参考として一点、写真を展示している。

資料掲載をご快諾くださった国立能楽堂・法政大学能楽研究所・神戸女子大学図書館に厚く御礼申し上げる。能絵関連の資料は、国立能楽堂・神戸女子大学古典芸能研究センターなどで、オールカラーの美しい絵を掲載した冊子を複数刊行されていて、それを参照させていただいた。

2023年7月1日 奈良大学文学部教授 三宅晶子

令和5年度奈良大学図書館企画展「狩野派 能絵二十三枚」出品目録

7月1日(土)－10月14日(土)

1 老松	13 龍田
2 白楽天	14 三井寺
3 和布刈	15 芦刈
4 兼平	16 景清
5 忠度	17 夜討曾我
6 井筒	18 鍾馗
7 野宮	19 舍利
8 采女	20 車僧
9 杜若	21 融
10 雲林院	22 海人
11 小塩	23 猩々
12 西行桜	

*参考資料展示にあたって、国立能楽堂・法政大学能楽研究所・
神戸女子大学図書館にご高配を賜った。深謝申し上げます。

特別展示 (個人蔵)

- (1) 「洛中名所扇面図絵」四条河原
- (2) 観世寿夫筆〈自然居士〉の古き謡節付け
- (3) 宝生流鎮扇(十松屋福井製)
朱入四季草花・牡丹入四季草花・菊水・虫秋草(融)・波
- (4) 根付け 獅子頭 六世野村万蔵作
- (5) 梨地独楽蒔絵 伝阿古作 「弥左衛門(花押)」 室町時代 (北村治旧蔵)
- (6) 黒地杜若蒔絵小鼓胴 伝盲折居作 室町末期 (北村治旧蔵)
- (7) 梨地扇面蒔絵小鼓胴 江戸時代
- (8) 椿蒔絵小鼓胴 江戸時代
- (9) 桐蒔絵小鼓胴・皮 鈴木理之作